
ショート・ショート・ラブ・レター

鈴原 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショート・ショート・ラブ・レター

【Nコード】

N1798M

【作者名】

鈴原 薫

【あらすじ】

恋する女の子の目線から描く、なんのへんてつもない、でも彼女にとっては一つ一つが波瀾万丈の学校生活を綴った短いラブストーリー。

目の前に立った陽の目線は、葵の目線とまっすぐ向き合う。中三女子の平均身長よりやや高い葵と男子平均よりやや低い陽が並ぶとほぼ一緒の背丈になってしまったという結果だった。実際には陽の方が1cmほど大きいのだが、人間の残酷な瞳はその程度の差は視認してくれない。

「じゃ、俺はLかな。おーい」

「あ、待って」

名簿付近にいる友人に声をかけようとする陽を葵は止めた。

「陽はどう見てもSでしょ」

「は？」

陽の明るい笑顔が一瞬にして陰悪になる。やばい、言葉選びを間違えた。やはり男のプライドうんぬんがあるのか、陽は身長のことを密かに気にしている。葵はなんとか取り繕おうとあえて笑顔を崩さずに続けた。

「Mでもいいかもしれないけど、たぶんSじゃないかな？サイズ表見て決めたら？」

「どうせお前と一緒に体格なんだから、わざわざ見に行かなくてもいいだろ」

「でも…」

「悪かったな『どう見てもS』で！どうせお前と違ってチビだよ」

ムツとした顔のまま群れの中に混じった陽を見送って、葵はため息をついた。どうしてもこうなんだろう。こんな風に怒らせるんじゃないで、ただ楽しく一緒にいたいだけなのに。人間には視認できないはずの1cm。でも葵にとっては長い長い1cmだった。

午後の授業はぼんやりと過ごした。陽は数分後にはすっかりいつもの陽に戻っていたけど、やっぱりどこか元気がなかった。たぶん誰よりも見てる葵しか分からない陽の小さな機微。葵は何度目かのため息をついた。こんなに小さな事でも気が付けるのに、どうして私は陽に嫌われないように動けないんだろう。陽は短気だけど、怒りが長続きするタイプではないから明日には普通に接してくれる

はずだ。しかし、葵は一時でも陽を傷つけた自分が許せなかった。
ああもう、私の無神経！

後悔は心の中で大洪水だったが、今さら謝るのも何か不自然で、
葵はただ明日の自分が陽に嫌われない事を祈るしかなかった。

だが、次の日から陽は葵を避け始めた。はっきりと無視されている訳ではなかったが、なんとなく一緒にいたくないのが分かってしまつて葵は距離をとるしかなかった。また傷つけてしまうかもしれないと考えたら、積極的になんかなれるはずもなかった。

陽のいない葵の生活は、色がなくなったようだった。みんなと笑つていても、心は冷えたまま。文化祭の準備期間でみんなと接する時間が増えるのが苦痛でしかなかった。

いつもなら、喧嘩してもすぐ元に戻れたのに。とうとう、私、嫌われた…？ 頭は陽のことでいっぱい、体の真ん中がずっとよどんでいるようだった。

そんな状態でも、楽しい文化祭は暦通りにやってきた。

「はああああ…」

葵は人気のない中庭で頭を抱えた。今教室はクラス企画の最終追い込みの真っ最中のはずだが、もう限界だった。ずっとここにいたい…しかし午前中には仕事割が入っている。いつまでも逃げていられる状況ではなかった。

「拷問だわ…」

「……葵？」

風を切る音が聞こえるほどの勢いで振り返ると、陽が中庭に入ってくる所だった。体が反射的に動き、葵は茂みの陰に隠れた。あ、あれ？ 私が避けてどうするんだ。パニック寸前の頭をどうにか落ち着かせ、葵はおそろおそろ茂みから顔をのぞかせる。と、目の前に立つ陽とまっすぐ目が合つて再び頭が沸騰しかけた。

「な、何…どうしたの陽…？ 今ちよっと気持ち悪くなっちゃって、少し休んだら教室戻るから…」

我ながら酷い言い訳だ、と葵は思った。気持ち悪いなら保健室に行くべきだし、そもそも病人は茂みに隠れたりしない。陽はしばらく黙っていたが、少し微笑んで言った。

「午前の担当のヤツがお前探してたから早く行ってやれよ。ごめんな、邪魔して」

「ひか…」

止める間もなく陽はきびすを返した。歩き去ろうとする背中を見て、葵はどうしたらいいか分からなかった。先程の陽の微笑みが頭から離れない。陽、どうしてそんな悲しい顔してるの…？

大声で呼び止めたい。行かないで。でも、私、こんなにあからさまに隠れた。悲しい顔…また陽を傷つけた？これで完全に嫌われた？ごめんね、謝るから。何度だって謝るから。陽…。

「う…ごめんねえ…ううああんごめんね…陽…！」

いろいろな感情がぐちゃぐちゃになって、葵は子供のよう大声を上げて泣き出した。陽がぎょっとした顔で引き返してくる。

「お前…っ何で泣いてんだよ！？…どうしたんだよ？俺のせいか？ごめんな、俺のこと嫌いでいいから。泣くな、頼むから」

優しく頭に載せられた手が意外で、葵はべちよべちよの顔のまま陽を見上げた。

「どうして…陽を嫌うの…？私が…もう、嫌われたかと思ってたのに…」

「はあ？何で俺がお前を嫌わなくちゃいけないんだよ。そもそも最近避けてたのお前だろ？」

「違うよう…陽が私を避けてたんだよ。私が、無神経なこと言ったから…」

「無神経って何？」

「え…私『どう見てもS』って…怒ってたんじゃないの？」

「いやあれは俺が悪いだろ。男子と女子でサイズ表が別だったんだな。確かにあれは『どう見てもS』だった。早とちりで怒ってごめんな」

「ううん…私も何も考えずにものを言ったから…」

「いや…ってかお互い嫌われたと思って避け合ってたなんて俺らバカだな」

「間違いないね…ふふ」

「やっと笑ったな」

座り込んだままの葵に、陽が少しそっぽを向いて片手を差し出す。葵はこぼれるような笑顔でその手を取った。

祭りは、今、始まったばかりである。

— F I N —

(後書き)

ここまで読んでくださいまして、ありがとうございました。

このサイトでのデビュー作です。

実はこの小説の陽のモデルは私の彼氏様でして、彼と喧嘩した時に思いついた作品です。大変失礼な話ですね(笑)私と彼も身長差が1cmしかなく、彼は大変気にされております。ちなみに名前も彼の名前を少しもじって使っています。陽という字がひかるでは変換してもらえないので、執筆中はずっとあきらと打っていました。おかげで後半ごっちゃになって大変でした。

そういえば私の力量不足で結局出せずに終わってしまいました。葵ちゃんには向日という名字がありました。名前と合わせるとヒマワリ：ということ。ヒマワリは太陽を追いかける、という迷信にあやかってです。安直ですが結構気に入っています。

これからも小説を書き続けたいと思っていますが、ものすごいスローペースです。そこは自信があります。できれば気をながく持って見守ってくださいれば幸いです。

それではまたお目にかかれることを願って。

0／06／25 鈴原薫

201

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1798m/>

ショート・ショート・ラブ・レター

2010年10月11日08時36分発行